
真眼の魔法少女シェリナ 異世界見聞録偽典

朝日光司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真眼の魔法少女シェリナ 異世界見聞録偽典

【Nコード】

N9930D

【作者名】

朝日光司

【あらすじ】

世界に危機が訪れるとき、新たなる魔法少女の伝説が始まる！彼女の名は、真眼の魔法少女シェリナ！あなたは、新しい歴史の証人となる この作品は4月1日特別企画です

その1（前書き）

この作品には“異世界見聞録魔王付き”のキャラクターが出演しておりますが、直接的な関係はありません。あくまで番外編です。

一部キャラの設定に変更がありますが、ご了承ください。

その1

助けて……

助けて……

どうかこの世界の危機を救ってください

この絶望を打ち払えるのはあなただけなのです

のあなただけが唯一の希望

どうか世界を……

「……朝」

そう呟いて、紅^{こうなぎ}風シェリナは目を覚ました。上半身を起こし、しばしそのまま静止。まだ開ききっていない眼でぼうつと目の前を見つめる。もっとも、その光景が頭の中に入っているようには見えな
いが。

肩より少し下まで伸ばした白銀の髪に、白く抜けるような肌。そして、ルビーのように赤い瞳。彼女は先天性色素欠乏症、俗に白子^{アルビノ}と呼ばれる少女だった。

その容姿は幼いながらも整っており、かわいいと言うよりは美しいと評した方がいい美貌の持ち主だ。その特異な外見も彼女の神秘的な美しさを引き立てるのに一役買っている。

そんな彼女はそのまま完全に覚醒しているとはいえない頭で、先ほどの夢のことを考える。

「……助けを、呼んでいた？」

なぜあんな夢を見たのだろうか？ 自分の“あの力”に関するあのものなのだろうか？ だけど、そのことを知っているものは家族を含めてごく少数だ。なのになぜ……。

シェリナは、先ほどの夢をただの夢とは考えていなかった。その理由には、彼女自身が普通とは少し違う少女だからということもあったが、彼女の中の何かがそれをただの夢だと切り捨てることを拒んだからというもある。助けを求めている彼女は一体？

いずれにしろ、今のままでは情報が少なすぎて

コンコン

「シェリナ、起きてる？ そろそろ朝ごはんの時間よ」

「……さっき起きたところ。今着替える」

ドアをノックして入ってきたのは彼女の姉、紅風雪（こうふうゆき）だった。

腰の辺りまで伸ばした艶やかな黒髪が印象的で、小さめの顔にパツチリとした二重瞼の瞳。ツンと形良く尖った鼻と鮮やかなピンク色の唇。理想的なボディライン。文句なしの美少女だ。

高校生の彼女は両親が不在の今の紅凧家の家事の一切を取り仕切っているこの家の長女だ。優しく、控えめでありながら言うべきことはきっぱりと言う性格の彼女は、正に現代では絶滅危惧種に指定されている大和撫子と言った所である。

もちろん、学校でも人気は高く彼女に愛の告白をするものが後を絶たないらしい。非公認のファンクラブまであると言う噂だ。もっとも、当の本人はそんな周りの反応に気が付いてはいない。と言うよりも眼中にないと言ったほうが正しいか。彼女の心の中には、すでに一人の人物がずっと住み続けていることをシェリナは知っている。

そんなことをとりとめもなく考えていたシェリナを覗き込むように見つめる雪。

「どうしたの？ まだ寝ぼけてる？」

「……そうみたい」

「もう、今日から新学期よ？ 確かに、この陽気で眠くなるのは分かるけど……」

「大丈夫、もう目が覚めたから」

「じゃあ早く着替えて降りてきてね？ ご飯が冷めちゃうから」

そう言いながら雪はシェリナの頭をなでる。傍から見たら子ども扱いされているように見えるが、シェリナ自身は姉のこのようなスキンシップが大好きだった。今も幸せそうに微笑みながら雪の手を受け入れている。

その後、朝食の支度の続きをしに部屋を出た姉を見送ってから、シェリナは洗面所に向かった。顔を洗って、自室に戻り制服に着替える。彼女は小学生だが、通っている学校は制服があるタイプの所だ。

白を基調として青いラインが数本入っている制服に着替える。姿を見ながらまだ少し寝癖がついている髪を整え、もう一度下に向かおうとしたところで、先ほどの夢のことを思い出す。

だが、情報が少なすぎる。今は考えても無駄だろうと思い、一旦置いておく事にした。

階段を下りて食卓へ行くと、味噌汁の香りが鼻腔をくすぐる。そこでようやく、自分が思っていたよりも空腹であるということに気が付いた。

「おはよう、お姉ちゃん」

「おはよう、シェリナ。ご飯できているわよ」

机の上には炊きたての白米とお味噌汁。漬物に焼き鮭。これぞ日本の朝の食卓という感じだ。シェリナが席に着くとエプロンを外した雪も席に着く。

「……凍夜お兄ちゃんは？」

「凍夜は部活の朝練だからもう家を出たわ。始業式の日ぐらいゆっくりしていいのにな」

この家の長男である凍夜は剣道部に所属している。筋が良く稽古も熱心にこなすので部内ではエースなのだそうだ。もっとも、その

熱意は実はある人物を倒すためのものだと言うことをシェリナは知っているのだが。

手を合わせる雪を見ながらシェリナも手を合わせて一緒にいただきますをする。姉が作ってくれたご飯は今日もとてもおいしかった。ご馳走様も一緒に言った後、自分の食器を流し台へと運ぶシェリナ。

「後片付けは私がする」

「え？ 別にいいわよ？ シェリナも学校に行く準備があるでしょ？」

「昨日の内に済ませた。問題ない」

「じゃあ、いつしよに……」

「お姉ちゃんは天真お兄ちゃんを起こしに行ったほうがいい」

その名前が出た瞬間に、雪は頬を赤く染める。

葉上天真はじょうてんまは向かいに住んでいるご近所さんだ。雪とは同年齢で所謂幼馴染と言う間柄。そして、この雪の反応を見れば分かるように、幼いころから現在進行形で彼女が恋をしている人物でもある。

「今日はとても過ごしやすい陽気だから、きっとまだ寝てる。起こしに行つてあげた方が良い」

「えっと、やっぱりそう思う？」

彼は人格的にはあまり問題の無い人物なのだが、その欠点の一つに何よりも睡眠を愛するというものがある。特に今日のような陽気の日には放つて置くと一日中目を覚まさないかもしれない。過去に実例があるだけに雪も心配していたのだろう。

「じゃあ後片付けは任せてもいいかな？ 私は天真を起こしてくる

から。そのまま一緒に学校へ行くことになると思うから戸締りもお願いでいい？」

シェリナが頷くのを見て雪は早足で玄関に向かった。その足取りが弾むようだったのは見間違いではないだろう。姉の後姿を見送った後、シェリナは手早く洗物を済ませる。雪の手伝いで家事を一通り学んだ彼女にとっては、この程度のことは既にたやすいことだった。

その後、自分の部屋に戻り荷物を確認。忘れ物が無いことを確認し、戸締りを点検する。全部終わらせて家を出るころには結構良い時間になっていた。

そのまま家を出て玄関に鍵を閉める。と、向かいからも人が出てきた。

「ふああああ……。あ、シェリナちゃん、おはようございます」

そう言いながら、天真はまだ半分眠っているような目をシェリナに向けた。その髪には寝癖がついていて、制服もどことなく着崩れを起こしている。相変わらずの怠惰で枯れたオーラを周囲に発散しながら、姉の思い人はシェリナに朝の挨拶をした。

「おはようございます、天真お兄ちゃん。やっぱりまだ寝ていたんですか？」

「いやいや、この陽気ですよ？ 起きていろって言う方が無茶だと思いませんか？ “春眠暁を覚えず”という法律もありますし」

「それは法律じゃありません。もう、天真は春になるとこれなんだから」

少し頬を膨らませながらそんなことを言ったのは雪だ。だが、口では文句を言いつつも天真の寝癖を直したり、制服を整えたりとかがいしく動いている。

「それじゃあ皆そろったことですし、行きますか。教室で二度寝したいですし」

「はあ、新学期だっていうのに天真は相変わらずだね」

「それが天真お兄ちゃんだから」

「シェリナちゃん、ありがとうございます」

「……天真、シェリナは褒めていないと思うの」

そんな他愛ない話題に花を咲かせつつ、彼らは学校に向かう。

しばらく3人で進んでいくと周囲にだんだんと人が増えてきた。

みなシェリナ達と同じく学校に向かう生徒達だ。と、その時

「天真せんぱーい！」

そんな声とともに天真に抱きつく人影。その瞬間、シェリナは自分の姉の顔が怒りでひどく歪むのを目撃した。見てはならないものを目撃してしまい、慌てて視線をそらす。

「つとと。美亜^{みあ}さん。朝から元気ですね」

「もちろんです。私はいつでも元気いっぱいですから。それに、今日は朝から天真先輩に会えたからさらに元気なんです」

満面の笑みを浮かべてそう天真に言う少女は天真達の一つ下の学年で名前を楠木美亜^{くすのきみあ}と言う。2、3ヶ月前から天真に過剰なほどのアタックを始めた金髪碧眼の美少女だ。クオーターらしい。

その髪は朝日を浴びてまぶしいほどに光り輝いている。顔の中心では勝気そうな瞳が強い光をたたえており、健康的な美しさが彼女を彩っている。

「それで美亜さん、いつまでこのまま私にくっついていく気ですか？」

「先輩は私と一緒に登校するのは嫌ですか？」

「いえ、別に嫌ではないですけど……」

「じゃあこのままでもいいですよね！」

満面の笑みで天真の言葉を遮る美亜。心なしか自分の体をこすり付けるようにしている。と、

「……美亜ちゃん」

絶対零度の声が春の陽気を凍結させた。

「あれ？ 雪先輩いたんですか」

「あら？ 最初から居たんですけど、美亜ちゃんはもう老眼にでもなったのかしら？」

「ごめんなさい。私天真先輩以外は目に入らないもので」

「ずいぶんと都合の良い目をしているのね？ それとも頭かしら？ 自己中心的な女性性は男性に嫌われるわよ？」

「なるほど、さすがに経験者の言葉は重みが違いますね。以後気を付けます」

「まあ、気をつけてももう手遅れだと思っただけだね」

「ふふふふふふ……」

「うふふふふふ……」

ゴゴゴゴと背後に擬音を背負いながら周囲にプレッシャーを放

出する二人。周りの人達が原因不明の体調不良にみまわれ、上空を飛んでいた鳥達がボトボトと墜落していく。その中心で、天真は引きつった顔のまま脂汗をたらたらと流し続けていた。

「し、シェリナちゃん。お兄さんと一緒に学校へって早!？」

シェリナをだしにしてこの場からの逃走を図ろうとした天真は、目が合った瞬間に数メートル先まで移動したシェリナに驚愕する。

「天真お兄ちゃん。人柱って知っていますか？」

「黒い!？ シェリナちゃん、微妙に黒くないですか!？」

妹のようにかわいがっていた少女の知りたくなかった一面にちよつと涙目になる天真。だが、その間にも二人の修羅から発せられるプレッシャーは増大してゆく。もはやこれまでかと天真が覚悟を決めたその時、救いの神は思わぬところから現れた。

「はあ、はあ、もう姉さん。僕を置いて行かないでよ」

「あ、麗^{れい}」

美亜によく似た少年の登場により、美亜のプレッシャーが消える。同時に相手が居なくなつた雪も自身のオーラを引つ込める。

「ごめんね？ 天真先輩の後姿が見えたからつい」

「……僕にはまったく見えなかったんだけど。大体、僕何キロも走ってきたような気が」

美亜アイは数キロ先の物体を見分けるらしい。特定の人物限定だろうが。その時、天真がずいっと麗の前に出る。

「……麗君、あなたは私の命の恩人です。この借りはいつか必ず返します」

「えっと、天真さんが何を言っているのかよく分からないんですけど」

美亜の弟である楠木麗くすのきれいは感極まったような天真の様子に首をかしげる。その動作により姉と同じ光に輝く金髪がさらさらと流れ、宝石のような碧眼には困惑の色が浮かんでいた。華奢な体格と中世的な顔立ちから、服装しだいでは女の子にも見えるであろう美少年だ。

そんな彼の困惑している姿を苦笑しながら見ていた雪が朝の挨拶をかける。

「おはよう麗君」

「あ、雪さん。おはようございます」

年上の美人に声をかけられて若干緊張気味の麗。その頬は赤く色付き、どう見ても憧れの先輩を前にした純情少年だ。

と、その時彼の傍から不穏な気配が。

「おはよう。麗」

「シェリナ、おはよう。今日は皆さんと一緒にだったんだ」

「……私に気が付かなかったの？」

「え？ あれ？ シェリナ？」

「私よりも雪お姉ちゃんの方に目がいつていたの？」

「いやあのシェリナ？ 何でそんなプレッシャーを背負って」

先ほどの二人に勝るとも劣らないオーラを背負って麗をにらみつけるシェリナ。なんだか分からないがものすごく命の危険を感じる

麗。

「て、天真さん。何がどうなってって、あれ!？」

気付いたときには天真、雪、美亜の3人は既に数十メートルも先行していた。

「やっぱり春は眠いですね」

「もう、授業はちゃんと受けよう?」

「じゃあ、先輩に私が膝枕を」

身の危険を察知した3人は生贄を残して逃げることにしたらしい。薄情この上ない。そんな3人に見捨てられたかわいそうな子羊は、今正に獰猛な肉食獣に捕食されようとしていた。

「……シエリナ」

「……何?」

般若もかくやという表情で麗を睨み付けるシエリナ。一瞬腰が引けそうになるが、何とかその場に踏みとどまる。

「あのさ、僕何かシエリナを怒らせるようなことしたかな? もしそうだったらごめん、あやまるよ」

「……別に何もしてない」

シエリナはあまり表情が豊かな方ではない。むしろ無表情だと言っているだろう。だが、今はすねたような顔でそっぽを向いていた。他の人が見ても分からない位の微細な変化だが、ここ3ヶ月で麗にもようやく彼女の表情を見分けることができ始めてきた。

「うん、でも僕がシェリナの機嫌を損ねたのは事実みたいだから。
ごめん」
「……」

その言葉からは真摯な思いを感じ取ることができた。麗は本気で謝っているのだろう。まあしょうがないかと内心で溜息をつきながら、いいかげん許してあげようと麗のほうを向こうとし

曲がり角から急に飛び出してくる車。シェリナを助けようと我が身を投げ出した麗が車にはねられる。その頭部から大量の血を流しながら麗の瞳は光を失っていく

「っうあ!?!」
「シェリナ!?!」

突然うめき声を上げながらしゃがみこんだシェリナを見て、麗があわてて手を差し伸べる。

「大丈夫!?! 具合でも悪いの?」
「……平気、ちょっと貧血気味なだけ」

そう気丈に言い放つシェリナだったが、その顔色は誰が見ても心

配しそうなくらいに青白くなっていた。足元も少々おぼつかなくなっている。

「ちょっとつていう顔色じゃないけど……今日は始業式だけだし、辛いなら家に帰ったほうが」

「平気、もう直ったから」

確かに徐々に肌に赤みが戻ってきてる。足元もしっかりしているし、彼女が言うように、もう大丈夫のようだ。

「シェリナがそう言うなら無理に休めとは言わないけど、でも少しでも気分が悪くなったらちゃんと先生を頼ったり、保健室に行ったりするんだよ？」

「わかった。ありがとう」

そう言って微笑むシェリナ。その笑顔を真正面から直視してしまった麗は顔を赤くしながら見惚れてしまう。

「……どうしたの？」

「え？ い、いや何でも無いですよ！？」

「……？」

君の笑顔に見惚れていましたなどと言える筈も無く、あわてて視線をそらす麗。混乱していたために語尾がおかしくなっている。

「春ですねえ」

「春だね」

「春よねえ」

「どわあっ」

いきなり背後から声が聞こえてきて麗は驚きの声を上げる。あわてて振り向くと、先ほど先行したはずの3人の姿が。

「な、姉さん達先に行ったはずじゃ？」

「あらー？ もしかして二人っきりのほうが良かったのかしらー？」

「ちよつ、何でそうなるのさ！？」

「ねー？ シエリナちゃんもそう思ってたわよねー？」

からかうような美亜の調子に、赤面するシエリナ。思わず駆け足で逃げ出してしまう。

「あ、ちよつとシエリナ？ もう、姉さんがからかうから」

「ごめんごめん。ほら、早く追いかけないとお姫様が先に行っちゃうわよ？」

「だからそういうのじゃ、ってちよつと待ってシエリナ」

あわてて追いかけてこようとしている麗の気配を背後に感じながらも、シエリナは自分の顔を見られたくない一心で進む。だが、いくら華奢でもやはり年上の男の子。見る見るうちに距離が縮んでいき、もう少しで追いつくというところで……

不意にそこが見覚えのある曲がり角の手前だということに気が付いた。

あわてて足を止めるシェリナ。

「うわつと！？ どうしたの？」

唐突に立ち止まったシェリナに、いぶかしげな視線を向ける麗。
だが、そんな彼に謝罪の言葉を述べる前に、

ブオオオン！

突然曲がり角から猛スピードで飛び出してくる車。そのまま勢いを緩めずにシェリナの眼前を通り過ぎていく。

「！？ シェリナ、大丈夫！？」

振り向くと心配そうにこちらの顔を覗き込む麗。その向こうからあわててこちらに駆け寄ってくる姉達3人の姿も確認できた。

「大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

「シェリナ、怪我は無い？」

「大丈夫シェリナちゃん？ たくどこ見て運転してるのよあの車！」

「大丈夫、怪我は無い」

多少青ざめた顔を見せながらもしっかりとした声で答えるシェリナ。その様子に一安心する一同。

何事も無かったということであ堵した一同はこのままでは遅刻するというシェリナの至極全うな意見により通学を再開する。めいめいが世間話をする中でシェリナだけがうつむいて口を閉ざしていた。

と、そんな彼女の傍に雪がやってきて周囲に聞こえないように小声で話しかける。

「シェリナ、もしかしてさっきの光景を“見た”の？」

「……うん」

「そう……」

シェリナの答えに一瞬心配そうな表情を見せる雪。だが、それを振り払うと、シェリナの頭をなでる。

心配は要らないという思いを込めて優しく頭をなでてくれる手の感触がシェリナにはとてもうれしかった。

その1（後書き）

突っ込み上等。

その2（前書き）

人気が出たら続編制作の可能性あり。

その2

私立馬部流学園しりつばへるがくえんは東京近郊にある詩鳴市しなるしのほぼ中央に位置し、小学部から大学までを有するエスカレーター式のマンモス校だ。

広大な敷地に建てられた、最新設備をこれでもかというくらいに取り込んだ校舎。それでいて公立並みの授業料のため、全国から入学希望者が殺到している。遠方からの生徒のために寮も完備しているのだから至れり尽くせりだ。

各種制度も充実しているので、学業でもスポーツでも全国のトップレベルの若者達が集まってくる。全国模試の上位常連が何人も在学しているし、クラブ活動も軒並み全国出場常連だ。

生徒達の自主性を重んじた校風により教員よりも生徒の権限が強いというところも人気の一つだ。生徒会ともなれば教員とほぼ対等の立場での発言権があるほどだという。

こんな冗談のような学校はどこぞの金持ちの『萌える学校生活を応援したい』という冗談のような考えによって10年ほど前に新設されたらしい。真偽は定かではないが。

そのためか、確かに能力的には優秀だが人間としてもものすごく“濃い”生徒が数多くいることでもまた有名である。

「見たわよ見たわよ見ちゃったわよー！シエリナー！」

「萌ちゃん、おはよう。また同じクラスだね」

掲示板に張り出されていた新しいクラスを確認して、教室に入つたシエリナに朝から騒がしくシエリナに声をかけてきたのは御堂萌^{みどうもえ}。シエリナの友人の一人で、三つ編みお下げに眼鏡がトレードマークの女の子だ。

明るい性格で、友達が少ないシエリナにとっては大切な親友の一人だ。最も、少し困った趣味を持っているのが悩みの種だが。

「朝一つ上の麗先輩と登校してきたでしょ？ 何々、どういう関係？ もしかして恋？ L・O・V・E？ 金色の少年と白銀の少女…… ああ、私の2次元回路にビビツとくる組み合わせだわ！ 今度の同人誌のネタはこれで決まりね！」

彼女は自他共に認めるアキバ系。その実力たるや小学生にして既に同人誌を作成し、さまざまなイベントで売り出しているほどだ。そのため、年中無休でネームのネタを探し歩いている。噂では今度BLにも挑戦するとか。最近彼女の将来が不安になるシエリナである。

「なんだと？ シエリナてめー男ができたのか！？」

「咲ちゃんもおはよう」

肩を怒らせながらこちらに近づいて来る少女は間宮咲^{まみやさき}。彼女もシエリナの大切な友達の一人だ。もっとも、曲者度ではある意味萌を上回る逸材なのだ。

「シエリナ！ あんたはあたいと全国制覇をするんじゃないの」

か？ 男をくわえ込んでいる暇なんて無いんだぞ？」

彼女の容姿はショートカットに切れ長の瞳、シェリナと同じ綺麗系の美少女だ。しかし、その格好は床まで伸ばしたロングスカートには金属で補強されたグラブ。そしてなぜか腰のベルトにホルスターが付いており、そこにはヨーヨーが入っている。

彼女は正にスケバンであった。話によると親兄弟全員ヤンキーという筋金入りの家系だそうだ。ちなみに余談だが、咲の格好について最初は教師陣から猛烈な反発があつたらしい。しかし、優は理事長に『これはあたいの魂の姿だ』と直談判し、理事長はこの訴えを認めたそうだ。大丈夫かこの学校。

そんな彼女と大人し目のシェリナがなぜ親友をやっているのかというところ少し込み入った話になる。

シェリナは白子アルビノの容姿から分かるように黙っていても目立つ存在だ。そのため、学校では常に悪い意味で目をつけられてきた。早い話がいじめの対象になっていたのである。

もっとも、シェリナ自身がそれなりにしたたかな性格だったのと、シスコンの兄の暴走、その他もろもろの事情によつてあまり大事にはならなかったが。だが、それはいじめる側からすれば面白くなかったのだろう。

そんなわけでいじめっ子達は当時低学年にしてすでに初等部の番長（実際にそう呼ばれていた。この学校はおかしいと思う）だった咲を引っ張り出したのだ。そして二人は後に伝説となる3番勝負を繰り広げた（つくづくこの学校はおかしいと思う）。

第1戦でヨーヨー対決を迫られたシェリナは、得意げに普通のヨーヨーをする咲の目の前でループ・ザ・ループ（前方にヨーヨーを投げつけ、下から上に回転させる。戻ってきたヨーヨーをキャッチしないでそのまま複数回回転）を披露して勝利を収めた。

第2戦で折り紙対決を迫られたシェリナは、得意げに鶴を折った咲の目の前で悪魔（ものすごく難しい。プロの大人でも3時間かかる）を折り勝利を収めた。

第3戦でとうとうぶち切れた咲にガチンコ勝負を迫られたシェリナは、突っ込んできた彼女のみぞおちに肘を叩き込み、その反動で下がった顎を掌底で打ち上げた後、仰向けに倒れた彼女のこめかみを踏み抜いて完全な勝利を収めた。

その試合の後シェリナをいじめようとする輩は出てこなくなったが（一説によると咲を容赦なく叩きのめした姿に恐れを抱いたらしい）なぜかシェリナを気に入ったらしい咲と一緒に全国制覇をしようとうまとわり付くようになり、いつの間にか友達になっていたというわけだ。

「別に麗は私の恋人じゃない。それに何度も言うように私は全国制覇をするつもりは無い」

「そーかそーか、やっぱりあたい達には男よりも鉄火場のほうが似合ってるもんな」

「だから私は」

「えー？ せっかく次の同人誌のネタが見つかったと思ったのにー。

あ、でもでも咲ちゃんとか三角関係ということにすれば……」

「だから……」

「萌てめえ！ あたいたちをネタにして漫画を書くなんて何度言ったら分かるんだ！」

「話を……」

「でもー、シエリナも咲もものすごくキャラが立ってるからー、あなた達を見るだけでネタがわいてくるのよー」

「聞いて……」

「だからってこの間のあれはないだろ！？ 何であたいがあんなフリフリのドレスを着なきゃならないんだ！」

「お願い……」

「だってー、似合うと思ったんだもん。それにあれをネタにして3本もかけたし」

「だから描くなって……」

「黙れ貴様ら」

騒がしかつたはずの教室が一瞬にして静寂に包まれた。特に咲と萌の二人は一時停止ボタンを押した画像のようにピクリとも動かない。しばらくしてギギギギときしむような音を響かせながら、二人は先ほどの謎の声の発生源と思われる方を向く。

「？」

そこには、何が起ったのかわからないという風に、首を傾げるシェリナの姿が。傍から見れば、唐突に静まり返った今の状況が理解できずに、困惑しているように見えただろう。

しかし、萌と優には分かった。分かってしまった。その無表情の仮面の下には、大魔神もかくやというほどの、怒りの形相が眠っているということが。

「そろそろチャイムが鳴るから、席に戻ったほうがいい」

「ソウデスネシェリナサン」

「センセイニメイワクラカケチャイケナイモンネ」

かくかくとロボットののような動きで自分の席に戻っていく二人。その時丁度チャイムの音が響き渡る。馬部流学園のいつもの朝の風景だった。

今日は始業式だったので午前で終わりだった。遠出して同人誌を買いに行くという萌と、集会（何の集会かは聞かなかった。聞きたくも無い）に出なくてはいけないという咲と別れてシェリナは一人で家路についていた。

もうすぐお昼、今日の昼食は何かなと思いながら帰路を歩いて

助けて……

唐突に脳裏に浮かび上がるイメージ。その声は昨晚夢で聞いたものと同じであった。いや、昨晚よりもさらに鮮明になってきている。

「……あなたは誰？ どうして私を呼ぶの？」

呟きながら、シェリナは必死で先ほどのイメージを手繰り寄せようとす。なぜか、声の主を見捨てるという選択肢は彼女の中には無かった。

道路の脇によって目を瞑り意識を集中させる。先ほど脳裏に浮かび上がったものの軌跡をたどって、どこからそれが発信されているのかを突き止めようとする。そして

近くの神社の森。墜落する何かの影の姿を幻視する。

瞬間、弾かれた様に飛び出すシェリナ。脳内で現在位置と神社ま

での距離を算出、自身の移動速度を加味して目標地点への到達時刻を予測。およそ8分で神社に到達予定。

そしてシェリナは全速力で目的地へと向かった。

「はあっはあっはあっ」

全力で走ったのは久しぶりだった。荒れる呼吸を落ち着かせながら辺りを見回す。

そこは何の変哲も無い森の一角であつた。多少開けてはいるが、これといって特徴も無いと言うことも無い場所である。頭上も木に覆われていて、光もあまり入ってきていない。

だが、シェリナには分かっていた。いや、“視た”と言った方が正しいだろうか。もうすぐ、ほんの数秒で……

「!？」

突然辺りが光に包まれる。空から強烈な光が降りそそいでいるのだ。思わず目を細めるシェリナ。と、その時今まで感じたことの無い得体の知れない感覚が彼女の全身を貫いた。

「……来る」

ようやく光に慣れてきた目で前方の少し開けた空間、正確にはそ

の上空を見つめる。そして、“それ”は姿を表した。

それは見た限りでは光の玉のようだった。大きさは直径30センチくらいか。その球体が発光しながらゆっくりと地面に落ちていく。明らかに自然のものではない。その球体を瞬きもせずじっと見つめ続けるシェリナ。

そして、その球体が地面に触れると同時にいきなりはぜ割れる。その中から現れたのは

それは見た目の印象を信じるならばドラゴンと呼ばれる架空の生き物であった。

体長約30センチ。頭部からは2本の角が生えている。背中には2枚の翼があつて、鱗ではなく純白の毛皮に覆われた体。尻尾もある。四肢があるところを見るに、東洋の龍ではなく、西洋の竜のようだ。まだ子供らしく、獰猛な生き物というよりは、ぬいぐるみなどのマスコットを彷彿とさせる姿だ。

いきなり目の前に現れた存在するはずの無い生物に、さすがのシェリナもどう反応してよいのか分からなかった。直感にしたがつてここまで来たものの、目の前の生物をどう扱ってよいのか分からない。

と、そこでシェリナはあることに気が付いた。

「怪我をしている？」

その子竜は全身に怪我を負っていた。良く見れば純白の毛皮も所々赤くなっている。あわててその小さな生き物に駆け寄るシェリナ。恐る恐るといった感じで手を伸ばし、反応が無いことを確かめてから抱きかかえる。思っていたよりは重くなかった。

「治療をしないと……」

家に帰れば救急セットが一式そろっていたはずだ。そう思い立つが早いか、またしても全速力で駆け出していった。

どことも知れない空間、そこに集まっている数人の人影。

「逃しただと？」

そう声を発した人物は、集団の奥で一人豪華な椅子に腰掛けていた。雰囲気からしてこの集団の長なのだろう。声にも、その姿にも他者を問答無用で平伏させてしまうような威圧感が漂っている。

「申し訳ございません。しかし、行き先は判明しております。すぐに追っ手を差し向けましょう」

次に声を出したのは全身を漆黒の鎧で固めた巨漢であった。長の視線を受けながらもひるむことが無い。集団の中でも相当の実力者だということがうかがえた。

「ならばその役目、私にお任せしてもらってもよろしいですかね？」
「……ドクターか」

黒騎士にドクターと呼ばれる人物はその名の通りの格好をしていた。白衣に眼鏡、その瞳は残忍な光をたたえている。無邪気に虫を引き千切る、残酷な子供のような。

「丁度新しい実験体の性能調査をしたかったところなんですよ。目標が向かったのは存在レベルの低い世界ですよねえ。ならば好都合というところですか」

「目的はターゲットの確保だ。貴様の知的好奇心を優先させる様なら……」

「わかっていますよ。それでも仕事と遊びの区別はきちんとつける性分なんでね」

「……よからう。貴様に任せる。すぐに出発しろ」

「了解です。ふふふふ……」

そう言っただけに出て行こうとするドクター。その後姿を見送る黒騎士に一人の女性が近寄ってくる。

「……あいつに任せて大丈夫なの？」

「心肺はいらんだらう。ああ見えても幹部、仕事は問題なくこなすはずだ」

「いえ、心配しているのはそういうことではなくて」
「？」

と、その時立ち去ろうとしていたドクターの独り言にしては大きすぎる声。

「新しい世界、そしてそこにはもちろん新しい女の子！ はあはあ、美少女が、14歳以下の美少女が私を呼んでいる！ ふ、ふふふふ…… お兄さんが今行きますからねー」

「…… 人選間違っただか」

「…… かもしれないわね」

「…… どうか区別つけてないかな？ 公私の」

「私に言わないでよ」

変体ドクターの背中を見つめながら、その場の全員、不幸な世界の少女達の無事を祈ることしかできなかった。

その2（後書き）

実はドクターは魔王付きの方に登場予定。

その3（前書き）

パクリと言わないで。

その3

あなたにすべてを託します

どうかあの人を見つけてください

それだけが、唯一の希望なのです

お願いします、もう一人の

連れ帰った白竜（推定）の怪我は思っていたよりもひどいものはなかった。

しかし、衰弱が激しかったようで怪我の治療を終えて数時間たった今も目を覚ます気配は無い。時折うなされているような表情を見せるのみだ。

「……あなたはどこから来たの？ あの声の人を知っているの？」

問いに答えは帰ってこないと分かっているても、言葉が自然と出てきてしまう。自分自身でも不思議だった。なぜ、これほどまでにあの声の主のことが気になるのか。今も理解できない焦燥感がシエリナの胸の内をぐるぐると渦巻いている。一体なぜ

「……………ぐう」

「！」

その時、白竜がわずかなうめき声をもらす。あわててその顔を覗き込むシェリナ。その視線の先で、ゆっくりと目を開いていく白竜。

「……………」

焦点の定まらない瞳は金色の光を宿していた。まだ意識がはつきりとしていないのか、ぼんやりとこちらを見つめている。

「大丈夫？」

言葉が通じるのかよく分からなかったが、とりあえずそう問いかけるシェリナ。しばらくしてようやく意識がはつきりしてきたのか、その目に意思の光が宿り始める。

「……………君は」

「！？」

突然言葉を発した白竜に驚くシェリナ。もちろん、外見上の変化は微細なものであったが、内心ではここ数年無かったほどに驚愕していた。その反面、とりあえず言葉が通じそうだということに安堵する。

と、今度はなぜか白竜が驚愕の表情を見せる。そして開口一番、

「姫様っ！？」

と叫んだ。

もちろん、シェリナはお姫様でもないし、そんなあだ名で呼ばれたことも無い。というか、この白竜とは初対面のはずだ。

「姫様、ご無事だったのですね。よかった……」

考え込んでいたら、白竜は勝手に話を進めてしまっていた。さすがにわけの分からない誤解をされたままでは気分が悪い。

「私は、姫様じゃない」

「……え？」

きょとんとした表情を見せる白竜。かまわずシェリナは話を続ける。

「私の名前は紅風シェリナ。ここは私の家。怪我をしていたあなたを治療するために連れ帰った。ついでに言うと、私とあなたは初対面のはず」

「え？ え？ え？」

理解が追いついていないのか、眼を白黒させながら顔に疑問符を浮かべる白竜。

「でもその顔はイデア姫様で、あれ？ でも僕は次元を超えたはずだったらここは異世界で、そこにイデア姫様と同じ顔の人がいるって言うことは……」

器用に腕を組んでぶつぶつと呟きながら考え事に没頭する白竜。黙ってその姿を眺めていたが、こちらも聴きたいことは山のようにあるのでいいかげん正気に戻ってもらおうと声をかけようとした、その時、

「あああああああ——！！！！」

いきなり大声を出しながらこちらを指差す白竜。突然の出来事に今度はシェリナが目を白黒させる。

「まさか、君が姫様の“対存在”？　こんなに早く出会えるなんて……。いや、これも運命なのかも」

「……“対存在”？　私が？　運命って」

「えっと、シェリナ！」

「な、何？」

その勢いにたじろぐシェリナ。だが次の瞬間白竜が発した言葉に思考が吹き飛ばされた。

「魔法少女になってくれ！！！！」

思考が止まったシェリナは、脊髄反射で戯言をほざいた粗大ごみを窓から放り投げた。

「のおおおおおお！？」

軽くドップラー効果を聞かせながら、2階の窓から落ちていく姿を認めたシェリナ。ぴしゃりと窓を閉めた後、ここ数時間ほどの記憶を消去する。

「……明日の授業は」

「死ぬから!? いきなりそんなことされたら竜でも死ぬから!?」
「!?!」

いきなり奇跡の生還を果たした白竜に驚くシェリナ。

「……」

「って何無言で刃物を持ち出しているの!? 待って! お願いだから僕の話聞いて!」

「……ちっ」

「今舌打ちした!?」

さすがに全身全霊で命乞いをする相手を葬ることはできないシェリナは、机の引き出しから取り出したカッターナイフを、しぶしぶ元の場所に戻す。そのまま未だにがたがた震えている白竜と視線を合わせ、無言で話を進めるように促す。

「え、えーとじゃあ少し長い話になるけどいいかな」

「話は簡潔に、手短に」

「努力するよ……」

そこで咳払いを一つ。やがて神妙な顔になったムートは説明を始めた。

「まず最初に怪我を治療してくれたお礼を言わせてくれ。ありがとうシェリナ。僕はムート。ムートって呼んで」

「わかった、ムート」

頷きながら答えるシェリナに満足げに微笑むムート。そして話を続ける。

「僕はこの世界とは別の次元にある世界からやってきたんだ。僕の世界の名前は“オリジン”」

オリジンは魔法文明と機械文明が高度に融合した文明を持つ平和な世界だった。その政治形態は王制で、世界と同じ名を持つオリジン家と呼ばれる王族がその世界全体を統治していた。

オリジン家はその世界で最も力の強い魔術師の一族でもあり、その力を使って世界を平和のうちに治めていた。

しかし、ある時次元を越えて侵略者がやってくる。彼らの名前は“プルートー”。冥府の王の名を掲げる彼らはオリジン家を守る世界の至宝を求めて侵略してのた。

その至宝の名は“宇宙の瞳”^{コスモアイ}。それを使えばすべての次元を支配することもできるといわれているほど強力な力を秘めた秘宝だ。

当然、オリジン家をはじめとするオリジンの人々は侵略者を相手に戦った。悪しき者達に秘宝を渡すわけには行かなかったから。しかし、プルートーたちの力は強大だった。

主だったものたちは殺され、あるいは幽閉された。オリジン最強の王族達も歯が立たず、一人を除いて全員が虜囚の身となってしまう

った。

だが、捕まった王族は誰も宇宙の瞳コスモアイを持つてはいなかった。もしもの時のために、それは王族の末娘、最も幼くそれゆえ戦闘に参加しなかった姫に託されていたのだ。

彼女の名前はイデア。イデア姫は残った臣下と共に秘法を守りながら逃走を続けた。しかし、ブルートーの執拗な追跡の前にととうとう追い詰められてしまった。

そのとき、臣下を守るためにイデア姫は宇宙の瞳コスモアイを使用した。幼いながらもその潜在能力は王族1とまで言われていた彼女の願いに宇宙の瞳は答えた。しかし、魔術師としてまだ未熟だった彼女はその強大な力を制御することができなかった。

結果、彼女とその臣下達は自らの身を守るための結界の中に閉じ込められてしまい、外から手出しできなくなったのと同時に、身動きが取れなくなってしまった。さらに、力を暴走させた宇宙の瞳コスモアイは次元を超えてどこかに飛び去ってしまった。

「何とか皆が最後の力を振り絞って僕だけ結界の外に出られたんだ。その時、僕はイデア姫様から宇宙の瞳コスモアイの搜索の任を帯びて……」
「この世界にやってきた」

その通りとムートは頷く。だが、

「その事と私との間に何の関係があるの？」

シェリナの当然の疑問にムートは真剣な表情で話を続ける。

「アイデア姫様は強力な魔力を持つておられたゆえか、時々未来の出来事を未来視という形でご覧になれることがあった」

「……」

それはまさか自分の力と同じものなのだろうか。シェリナは内心の動揺を押さえ込みながらムートの言葉にじっと耳を傾ける。

「そして、そんなある日姫様ははるか次元の彼方、異なる世界に自分と同じ力、いや、力だけじゃなくて容姿、年齢全てが自分に瓜二つの存在を知覚した。」

ドクン、と心臓が跳ねた。

そうだ、今分かった。いや、前から心のどこかで理解していたのだ。あれは、あの声の主は

お願い、皆を助けて。もう一人の私

「あ、あの子は、私の……」

「そう、君とアイデア姫様は同じ魂を持った“対存在”。魂の双子と言っても良いかも知れない」

やっと分かった。自分があの声にこだわっている理由が。あれは私。もう一人の自分。同じ魂を持った私の半身。だから、あんなに

も求めていたのだ、声の主を。まるで引き裂かれた半身が呼び合うかのように。

「そして、イデア姫様の“対存在”たる君には大いなる力が宿っている。」

「大いなる力……未来視のこと？」

「それはその力の一部でしかない」

ゆつくりと、ムートが口を開く。

「その名は“真眼”」

「“真眼”……」

かみ締めるように呟くシェリナ。

「その力の詳しいことは実は僕も知らない、けれどそれはオリジンの王族の中に数世代に一人しか出てこないほど貴重な能力で、とてつもない力を秘めているらしい。」

「でも、私は未来を見るだけで、そんな力は……」

「それは力の使い方を知らなかったただだ。きちんとした方法さえ理解すれば君も力を扱えるようになる」

「……………」

そしてムートは器用に正座をするとその額を床にこすりつけた。

「お願いします！　どうかその力を姫様達を助けるのに貸してください！　もうシェリナしか頼れる人はいないんだ！」

すがるような声でお願いをするムート。だが、彼に協力するということとは、敵と戦うということだ。

まだ小学5年生でしかない自分が一つの世界を攻め滅ぼした敵たちと戦う。いくら自分に強大な力があると言われても、やることは殺し合いに他ならないのだろう。それを分かっているながら、なお助けてほしいといっているからこそ、ムートも真剣なのだろう。

普通ならば断るべきだ。自分は特別な存在だからという理由で敵と戦えるほど熱血な性格はしていない。むしろ厄介ごとには極力かわらないようにして生きてきたし、これからもそうするつもりだ。

だからここでの答えはNOでいいはずだ。なのに、なぜ……

（アイデア……）

遠い場所に存在するもう一人の自分、魂の双子。彼女のことを考えるたびに不思議な感情が胸の内を駆け巡る。私は

「わかった」

「え？」

気が付いたときにはそう口に出していた。ムートが信じられないという表情でこちらを見つめているが、自分でも信じられない。だが、

「あなたに協力する。アイデアを助けるために」

どうやら自分はもう一人の自分を放っておけないらしい。何もしないという選択肢は最初から存在していなかったようだ。

「じゃあ、魔法少女に」

「待て」

せっかく良い話でまとまりかけていたのに、再び不吉な単語を聞いてしまった。

「……魔法少女って何？」

「あれ？ 知らないの？ おかしいな、確かこの次元にもそういう存在の知識はあるって聞いたのに」

「……それは」

まさか、こちらの世界でおなじみの、コンパクトを使って変身したり、ステッキを振って魔法を使ったりする、フリフリの衣装の小学生位の年齢の女の子が実在しているというのか。

「魔法少女って言うのは成人を迎える前の魔法使いの女の子達の総称のことだよ。まあ訓練生とか見習いみたいなものかな。実力的にそう呼ぶのが失礼な子も何人かいるけど」

「……そうなんだ」

思っていたよりも普通の存在らしい。ムートの説明に内心で安堵するシェリナ。

「魔法少女になれば力も扱えるようになると思うからね、なっておいて損は無いと思うよ」

「それはどうやってなるの？ それ以前に魔法を使った事の無い私になれるものなの？」

「大丈夫」

ムートは安心させるようにシェリナに言った後、なにやら呟き始める。

「ゲート0401オープン」

すると驚いたことに、いきなりムートの前の空間に直径15センチほどの黒い穴が開いた。

「それが、魔法？」

「そう。これは亜空間との出入り口で中に荷物なんかを置いてあるんだ。やり方さえ知っていれば結構簡単だから、後で教えてあげる」

そう言つと穴の中に手をつ込んで何かを探し始めるムート。やがて目当てのものが見つかったのか、いくつかの品を中から引っ張り出した。

「とりあえずこんなところかな。さあ、好きなものを選んで」

そう言つて3つの品を床に並べる。そこには、

先端が三日月形になっている短いステッキ

小さな鍵の形のペンダント

模様の付いた卵

が置かれていた。

「さあ、どうしたの？」

「……………」

どうしろと、むしろ作者はどうしたいのか、シェリナは心の中で呟いた。

まずステッキ。セーラー服で戦えというのか。それ以前になぜにセーラー服。確かに元々は海軍の衣装だが。というかもう古いのでは？

次に鍵型のペンダント。カードを集めるのか？ それとも異世界を回って羽根を集めるのだろうか。いや、それは違う作品か。

最後に卵。確かに一番新しいものはある。しかし、なりたい自分と言われても急には思いつかない。というかこれを選んだ場合、自動的にマスコットキャラが一人以上増えるのでは？

「どうしたの？ 何か不備でもあった？ 僕の友人が自信満々に“向こうで魔法少女といったらこれだ”って言って一式渡してきた道具なんだけど」

「……………その友人とは縁を切ったほうが良い」

「え？ 確かに時々わけの分からないことを言い始めるやつではあるけど……………。気に入らないなら他のを」

「あなた達の世界で普通に使っているものが良い」

ムートが次に取り出そうとしたとげ付き金棒のような物を見て、シェリナはすぐにそう結論を出した。撲殺したくないし、私は天使でもない。

「え？ でも一応この世界に合わせた物の方が」

「むしろその方が駄目。友人のアイテムを使わせようとした時点で私はこの件から降りる。誰がなんと言おうと」

「そ、そうなんだ」

シェリナの迫力に頷くしかないムート。触らぬ神に祟りなしとはよく言ったものだ。

「えっと、じゃあ僕達の世界で普通に使っているやつを……あれ？」
「どうしたの？」

穴の中に手を入れたまま首を傾げるムートに何が起こったのかたずねるシェリナ。もしか、ムートの世界のアイテムが無いとでも言うのだろうか。

「いや、見覚えの無いものが入っていたから。こんなもの入れた覚えは……あれ？ 僕宛の手紙が付いてる」

そう言いながらムートがチェック柄の布の包みを引っ張り出す。確かにそこには手紙のようなものが張り付いていた。

「えーと何々、『ムートへ、これはもう一人の私のための変身アイテムで……』ってイデア姫様！？」

「！？」

驚いた顔でその名前を叫ぶムート。シェリナも僅かに目を見開いて驚きの表情を見せる。彼女はこの時のことまで予知して自分に戦う力を与えてくれたのか。

「どうやらこれは君専用のアイテムらしい。詳しい効果は使えば分かるって書いてあった。それにしても、いつの間にこんなものを……」

……」

ぶつぶつと呟きながら手紙を穴が開くほどに見つめているムート
を尻目に、シェリナは緊張の面持ちで包みを開封する。そこにあつ
たのは

中央に金色の輝きをたたえた宝石をあしらったペンダントだった。

ラグビーボール型の金属の板に繊細な彫金がなされており、その
中央に宝石がはめ込まれている。このような輝きの宝石はシェリナ
は見たことが無かった。おそらく、この世界には存在しない鉱石な
のだろう。

そのもう一人の自分からの贈り物を胸に抱きしめ、万感の思いを
こめてシェリナは呟く。

「よかった……。パクリじゃない」
「そっちかよ!？」

即座にムートが突っ込みを入れる。何気にそういうキャラなのか
もしれない。

「ま、まあこれでアイテムの問題は片付いたわけだし、後は……」

次の瞬間、ムートは弾かれた様に顔を上げる。

「どうしたの？」

「……奴等だ！」

その答えに表情を引き締めるシェリナ。

「くそ、追いかけてくるとは思っていたけど、早すぎる！ それにこの魔力の乱れは、無差別に暴れてこっちをいぶり出すつもりか！ まだ準備が……」

「何処？」

焦るムートとは対照的な、落ち着いた声音でシェリナが問う。――
瞬、その雰囲気は吞まれそうになるムート。

「いや、でも危険だ。まだ練習もしていないのに、いきなり実践だなんて。ここはしばらく様子を見て……」

「その間にも被害は広がっていく」

「う…… だけど今の君じゃあ」
「大丈夫」

ペンダントを手早く首に装着して、不思議なほどに確信をこめた声で断言するシェリナ。

「もう一人の私が力を貸してくれる。負けるはずが無い」

ペンダントから感じる暖かい力。それが会った事も無い、アイデアと呼ばれている自分と瓜二つの少女のものだということが、なぜか

分かった。

「……分かった。僕について来て。でも絶対無茶はしないでね。」

シェリナの表情に何かを感じたのか、ムートも覚悟を決めた様子で頷いた。

そして二人は戦場へと駆け出した。

その3（後書き）

これに力を入れたせいで魔王付きの方が遅れるかも。

その4（前書き）

いろいろ実験的に書いております。

その4

「はーっはっはっはっはー！」

馬部流学園に程近い新小田通り。主に学生向けの店舗が立ち並び、授業が半ドンだった今日のこの時間帯、若者達でにぎわうその場所は今正に阿鼻叫喚の渦に巻き込まれようとしていた。

「さあ、行きなさい。私の作品ナンバー330、ホワイトモンキー！」

「うきいっ！」

メインストリートの中央で馬鹿笑いをしていたのは次元を越えてやってきた侵略者集団“プルートー”の幹部、ドクターだった。そして、その傍には異形の影が。

「うきやきやきやきやきや！」

「「「「「きやああああー！！」「」「」「」

奇声を上げながら女子高生のグループに突っ込んでいったのは体調およそ3メートルほどの異形の猿人だった。

その顔は人間の風貌をしているが、手足は長く、それぞれ真っ白な毛皮で覆われている。服を着込んで、その背中には自身の身長よりも長い棒を背負っていた。

「うきや？ うきやきや！」

「きやあっ！？」

俊敏な動作でグループの中的女子を一人捕まえると……

「い、いやー！？」

いきなり胸をもみ始める。

「ちょ、やめてー！？ 変態ー！？」

「うきゃきゃ！」

ひとしきり女子高生の胸を堪能した後、特に何もせずその子を開放するホワイトモンキー。ほっと安堵の息を吐く少女、しかし、

「え？ あれ？ ちょ、私のブラが！？」

「うき？」

気が付いたときにはホワイトモンキーの手の中に水色の下着が。

「いやー！？ お気に入りだったのにー！？」

「うきよきよきよきよ！」

崩れ落ちる女子高生を残して、ホワイトモンキーは新たな獲物を求めて走り去る。

「うーむ。私としてはもう少し年下を狙ってほしいのですが。元となった実験体の意識が影響しているのか？」

主に女子中高学生をターゲットにセクハラを繰り返すエロ猿を眺めながら、そんなことを呟くドクター。微妙に不満らしい。

ピンポンパンポン

番組の途中ですが、緊急通信が入りました。

（作者ああああ！！！！ 何で俺様がこんな扱いなんだよおおおおおー！！！！）

（えー？ 君の出番がなくなりそうだったから出してあげたのにー）
（だからってこれは無いだろうこれは！？ 普通は天真のクラスメイトとかそんなだろう！？）

（いや、主人公はシエリナだし。その設定だと君出番ないよ？）
（う、し、しかし……）

（書いたけど容量の関係で出番が削られた凍夜よりは扱いが上だと思っただけ）

（むしろすっぱりと切ってもらったほうが良かったわ！）

（いや、それだと怪人のネタが無くてさー。というわけで諦めてくれ。大丈夫、好きなだけ暴れられるから）

（だからそれがやばいって……、作者？ おい作者？ ちょ、俺様の話はまだ）

（女性への上記のような行為は犯罪になります。読者の皆様は決してまねをしないようにしてください。それでは）
（それは当たり前だけど俺様の話を）

ガチャ。ツーツーツー。

失礼しました。それでは続きをどうぞ。

そうこうする内に警察が駆けつけてホワイトモンキーを包囲する。

「な、何だこいつは？」

「に、人間？ いや、猿か？」

「何で女物の下着をたくさん握り締めているんだ？」

対象を銃で威嚇しながら困惑の声を上げる警察官達。今まで遭遇したことの無い出来事なのだから当然といえば当然の反応なのだが。

「ふむ、この世界の守護者達ですか。丁度良い、戦闘データも集めておきましょう。ホワイトモンキー！」

「うきや！」

ドクターの声に反応し、疾風のように包囲網の一角に近づくや否やその長い腕を一閃する。

ド「オッ！」

「うがつ！？」

豪腕が警察官を3人同時にごみくずのように吹き飛ばす。あまりの出来事に他の警察官達は対処ができない。

「う、うわああああ!？」

パンッ！　パンッ！

恐慌状態に陥った一人が狙いも定めずに発砲。だが的が大きいのが幸いし、その弾丸は眼前の巨軀に吸い込まれ……

バチッ！

謎の発光を残して弾かれる。その結果に啞然とする警察官達。

「そんな魔術処理も施してないただの鉛玉では、魔力障壁を通常兵装に持っている私の作品に傷一つ付ける事は出来ないと言っのに。まあ、この世界の文明レベルではこの程度ですか。ホワイトモンキー、もういいですから邪魔な人たちを片付けちゃってください」

するとホワイトモンキーは動きを止めて両腕を頭上に振り上げる。一体何事かと周囲の警官達が思った次の瞬間

風が唸りを上げ、ホワイトモンキーの周りに渦を巻き始める。そして次の瞬間！

「うつきー!!」

腕を振り下ろすと同時に、周囲に発生する風の衝撃波。

「!?」

悲鳴すらその中に飲み込まれながら吹き飛ばされる警官達。すべてが終わった後、立ち上がる者は一人もいなかった。

「風の魔術との相性は予定値+30%ですか。思っていたよりも効果がありましたね」

目の前の結果に満足そうに頷くドクター。と、その時、

「てめえかつ。この騒ぎの犯人はっ」

「咲！だめだよっ」

その声にドクターが振り向く。視線の先にいたのは誰であろうシエリナの友達の萌と咲であった。

「この野郎、あたいのシマを荒らしやがって。ゆるせねえ！」

「咲！落ち着いて！警察の人達でも敵わなかったんだよ！咲が勝てる相手じゃないよ！」

「そんなもん、気合と根性でどうにでもなる！」

「だめだって！このままじゃあ私達、敗北 陵辱ルート一直線だよ！」

「……いや、お前の脳内ではこの後どんな展開が」

「だめっ、そんな触手なんて！？ ああ、そんなところにまで！？」
「萌、とりあえずお前が落ち着け」

ちなみに二人はそれぞれ買出しと集会の帰りにばったり会って、
せつかくだからちよつと喫茶店にでも、という所でこの騒ぎに巻き
込まれた。

そんな二人を無言で見つめるドクター。やがて、

「見つけたー！ お持ち帰りいいい！」
「ひぐ し！？」

ドクターの奇声にいち早く反応する萌。といいますか、あなたは
その年であるの惨劇を繰り返していたのですか。

「美少女発見！ ホワイトモンキー！ 2名様お持ち帰りです！」
「あ、あたいたちは食いもんじゃねー！」
「いやあああああ！？ 監禁調教プレイ！？」

それぞれが勝手なことをほざいている間にもホワイトモンキーは
迅速にマスターの命令を実行しようとする。これまでかと思われた
その時！

「はあっ」
「ごふっ！？」

突然、二人と一匹の間に乱入する影。長い黒髪を背後に流しながら
3メートル以上の巨体を吹き飛ばしたのは……

「二人とも、大丈夫？」

「雪姉！」

「雪さん！」

シエリナの姉、紅風雪その人であった。ちなみに二人は雪との面識がある。正義のヒーローよろしく助けに入った彼女の手には物干し竿。

「時間が無くてこんなものしか用意できなかったけど、間に合ったみたいね」

「雪姉！　いくら雪姉でもあんな化け物相手じゃ」

「分かってる。私が時間を稼ぐから、二人はその隙に逃げなさい」

「でも、それじゃあ雪さんが」

「大丈夫。二人が逃げたら私も逃げるわ。それより、来るわよ」

視線を向けると、ようやく起き上がった大猿がこちらを睨み付けて……

「あれ、なんか様子が……」

萌の言う通り、ホワイトモンキーの様子がおかしかった。じつと三人、いや、雪を凝視している。しかも顔を赤く染めて、鼻息が荒い。

「な、何……」

そのただならぬ様子に少しおびえた表情で後退する雪。

「あーこれはもしかして……」

その様子を興味深そうに観察するドクター。そして、

「うつきゃああああああああああああああああああ！！！！！！」
「「「きゃあああああああ！？」」」

突然雄たけびを上げるホワイトモンキーに、びっくりする三人。
だが、そんな様子も目に入らないのか、ホワイトモンキーは狂った
ようにその場を駆け回り、バク転し、飛び跳ねる。

「な、何が……」

「あー、そこのお嬢さん」

「はい？ 私ですか？」

いきなりドクターに話しかけられて、きょとんとした表情を見せる雪。

「どうやらホワイトモンキーはあなたに一目惚れしたみたいです」

「はあ……、つてええ！？」

突然すぎる展開に目を白黒させる雪。と、ホワイトモンキーがその挙動を止め、雪の前まで歩いてくる。

「な、つく！？」

あわてて構えを取る雪。ちなみに雪は武術の道場をやっている天真の家で雑刀を習っていて、その腕前は達人の域に入ろうかと言うほどに凄まじい。

そんな雪の様子を見つめながら懷に手を入れるホワイトモンキー。
そして取り出したのは……

「うきや」

「……はい？」

大粒のダイヤがはめ込まれたプラチナのリングだった。

「『給料3ヶ月分です。結婚してください』だそうです」

「給料あるのか！？ それ以前に言葉分かるの！？ とうか結婚って早！？ 一目惚れにも程があるぞ！？」

「咲、そこまで全力で突っ込みを入れなくても。気持ちは分かるけど」

外野の喧騒をよそに、先ほどまで女の子に痴漢行為を働いていたとは思えないくらいに真剣な表情で、雪を見つめるホワイトモンキィ。

「え、えっと……」

その真摯な瞳に見つめられて雪は……

「ごめんなさい！ 私好きな人がいるんです！」

深々と頭を下げて拒絶した。

「！？」

ホワイトモンキィの全身を走る衝撃。耐え切れず、膝から崩れ落ちる。彼は男として大事な部分で敗北したのだ！

「……なんだろう、なぜか涙があふれてくる」

「……泣くな萌。やつは男として立派に戦ったんだ。その男の最後

に涙は似合わねえよ」

その哀愁漂う背中に誰もが涙を抑え切れなかった。やがてホワイトモンキーは肩を落としながら去っていく。彼女への未練を断ち切るように。一度も振り返らずに。

その肩に手を置いて並ぶドクター。その顔には分かっているといった風な笑みが。その瞳には涙が。

「……今日は飲みましょう」
「……」

無言で頷くホワイトモンキー。そして二人は去って……

「って私はあなたの告白を見守るためにここにいるではありませんせん！」
「!?」

そこでようやく我に返るドクター（手にハンカチを握り締めている）。危つく侵略者としての本分を忘れそうになったのは秘密だ。

「つく、しまった！　あまりにも奴が哀れすぎて逃げるのを忘れてた！」

「うん！　確かにお猿さんがかわいそう過ぎて」

「うきやあああつ（かわいそう言うな）！」

年少二人のあんまりな言葉についに切れるホワイトモンキー。

「え？　あれ？　もしかして私何かいけないことした？　でも駄目なものは駄目だし……」

「雪姉、死者に鞭打ってるから、それ以上はちょっと……」
「さすがに可愛いそうすぎるよ……」

見れば再び撃沈しているホワイトモンキー。もう手の施しようが無い。

「ええい！ いつまで泣いているんですか！ もうこうなったら人まとめてお持ち帰りです！ それで良いですね？」
「うきゃあああああ！」

ホワイトモンキー復活。というかりミットブレイク。その周囲に風が集まり渦を巻く。

「ちよっ、ひよっとしてピンチ？」
「ひよっとしなくてもピンチだよ！ っていうかあんなの相手じゃ」「つく、何とか二人だけでも……」

弾丸のように飛び出すホワイトモンキー。もはやその姿は常人には捉えきれない。そのまま三人の下へと突っ込んでいく。

「！？ 天……」

哀れ三人の穢れなき乙女が怪物の餌食になるかと思われた、

その時……！！

ドゴオッ！！！！

「うぎゃああっ！？」

またしても吹き飛ばされる巨体。萌と咲には何が起こったのかわからない。だが、雪は見ていた。こちらに到達する直前、上からの謎の攻撃があつた。怪物を強襲したのだと。

「何奴！？」

ドクターが驚愕の表上下攻撃が行われた方向を向く。そこには一本の街灯が立っており、その頂点に謎の人影が！

そして

その4（後書き）

凍夜君の出番が見たいという奇特な方が居られたらご連絡ください。

その5（前書き）

正直、やりすぎたと反省しています。

その5

話は雪が萌と咲の二人をかばって出て来た時にさかのぼる。

この土地の地理に明るくないムートの先導は思った以上に時間がかかってしまった。

ようやくたどり着いた先には白衣の怪人物と巨大な猿の怪物。そして、その前に姉と友達二人の姿が。

「……雪お姉ちゃん、みんな」

「つと何とか間に合ったようだね、さあ、変身を」

やはりか。シェリナはそう胸のうちに呟いた。

「……家族や友達を巻き込みたくない。戦っているのが私だってばれたら皆心配する」

「それは大丈夫」

胸を張って答えるムート。

「変身後は“認識阻害結界”が自動的に全身を覆うようになってから。例えば素顔を見られても、自分の名前を口にしても、相手はそれがシェリナだとは気が付かない。頭の中で変身前のシェリナと変身後のシェリナが結びつかないようにするんだ。これは記憶媒体にも作用するから、写真なんかを取られても大丈夫」

さすがは異次元の魔法。そういう所のお約束はしっかりと守っているらしい。

「じゃあどうやって変身するの？」

「アイテムを握り締めて、心の中でそのアイテムの事だけに意識を集中させるんだ。そうすれば、おのずと変身キーワードが頭の中に浮かんでくる」

「分かった」

シェリナはペンダントを胸に押し当てるように握り締め、目を閉じる。そして、そのペンダントに、そこから流れてくる暖かい力に意識を集中させる。

すると、閉じた目の暗闇の奥から光が漏れ出すような感覚が。やがてその光は大きくなっていて、それが文字だと気付いた瞬間に、

バトルメールセットアップ
「戦衣着装」

シェリナはその呪文を唱えていた。

ペンダントからあふれ出す光。シェリナの体はその光に包まれる。やがて光は帯となり、シェリナの体に巻きついていく。帯が巻きついたところから光は実体化し、魔法少女の衣装へと変化していく。

そして、最後に額に現れるのは、中央に金色の宝石をはめ込んだ、目を意匠したティアラ。

ここに、魔法少女シェリナが誕生した！！

「す、ごい、初めての变身でこんなに魔力が」

その姿、その力にあっけにとられたかのような顔をして呆けた声

を出すムート。一方シェリナのほうも自分の体内を駆け巡るすさまじいまでのエネルギーを自覚していた。ともすれば暴走させてしまいそうなほどの。

「うきゃ ああああ！」

と、響き渡る雄叫び声。見れば怪物が正に今この瞬間三人に襲い掛からんと……

コンバットオープン
「戦闘開始」

その眩きと共に、ムートの首を鷲掴みにして一気にジャンプ！

「ちよつ、何する」

アタック
「攻撃」

「どあああああ！？」

一度の跳躍で10数メートルの高さに到達したシェリナは、そのままムートを敵に投擲。自身は街灯の天辺に着地する。

ヒット
「命中」

「うぎゃああつ！？」

「何奴！？」

敵の突進を阻害し、皆の無事を確認した後、白衣の相手に向き直る。そして

「この世に蔓延る悪の所業、我が金色の瞳が逃しはしない。この眼の見据える未来の先に、笑顔の花を咲かせるために！」

その服は純白。要所要所にフリルつきのドレス。精緻な金糸、銀糸の裁縫がよりいっそうその魅力を引き立たせ、それでいて装着者の動きを阻害しないような設計になっている。下も同色の短めのスカートに純白のニーソックス。

さらに衣服に負けないほどに白く輝く肌と白銀の髪、そして顔の中央で輝く二つの赤い眼と額の金の眼がその神秘さをよりいっそう際立たせている。

「真眼の魔法少女シェリナ、ここに推参！！！」

決まった。背景効果が眼に浮かぶくらいに決まった。

その魔法少女の登場に、誰も声が出せなかった。

そして、その場の主役は……

（なぜこんな前口上を！？　口と体が勝手に！？）

内心でもものすごく恥ずかshがっていた。穴があつたら入って埋まってしまうほどに。どうやら自分の意思ではなかったらしい。アイテムの仕業か。毎回こんなことをしなければいけないとしたら、

ある意味呪われている。

「き……」

その時、硬直していた萌が、

「きゃあああああつ！ 魔法少女！ 本物の魔法少女よおおおお
おお……！」

叫びと共に携帯を取り出し、カメラ機能で写真を撮り始める。

「いやあああああ！ 何でデジカメ持っていないのおおお！ で
も写メだけでもおおおお！」

「お、おい？ 萌？」

「あああああ！ こっち向いてええええええええ！ 握手してええ
えええええ！ サイン描いてええええええええ！」
「……」

壊れた友人を前にどうすることもできない咲。というか目が関わ
りたくないと言っている。

「うわあ、あの服かわいいなあ」

雪のほうは別の方面に感心していた。

その三人を見て、どうやら本当に自分の正体はばれてはいないよ
うだと、そこだけは安堵するシェリナ。これだと思いつきり戦えると
思い敵に向き直ると、

「ズ」

なぜか俯いてプルプルと震えている白衣の敵。そして、

「ズキユウウウウンンンンンン！！！」

「はい？」

なぜか射撃音の口真似をする白衣に困惑の表情を見せるその他の人々。そんな彼女達を無視して、背筋を伸ばしつかつかとシェリナの立っている街頭まで歩いていく。そして、

「ハートを打ち抜かれました。給料1年分です。結婚してください」

「お前もか！！！」

「しかも年端も行かない女の子に手を出している時点でさっきの猿よりやばい！？」

指輪を差し出すドクターに突っ込みを入れる友人二人。

そんなドクターを一瞥し、シェリナは街灯の上から飛び降りる。

「おお、私の愛を受け取ってくれるんだねハニー！ さあ、この胸の中に飛び込んでおいで！」

目指す着地点はドクター……

「私と結婚したかったら……」

の顔。

「都内一等地の家と土地を持ってきなさい」

ゴスッ

「ごふっ!？」

見事にドクターの鼻につま先をめり込ませたシエリナ。そこを足場にして再びジャンプ。空中で一回転しながら三人の傍に降り立つ。ドクターは鼻血を撒き散らしながら撃沈。

「大丈夫？」

「……あ、ああ。あたいたちは大丈夫。というか家と土地って、そんな夢も希望も無い。もらったら結婚するのか？」

「売る。そして株を買う」

「この子黒い!? 中身真っ黒だよ!？」

「株には夢も希望もいっぱい」

「汚れてる!? その夢と希望、欲望で汚れきってるから!？」

シエリナと咲がそんな漫才をしている間にも萌は写真を撮り続けている。

「あ、あの、サインいいですか? 後握手していただけませんか？」

「問題ない」

「ありがとうございます。あ、ここに萌ちゃんへって描いてください。できれば一緒に写真もとりたいんですけど」

既にアイドルの追っかけと化した萌は大はしゃぎだ。

「も、萌。今は一応戦闘中なんだぜ？ 雪さんも何とか言ってやって……」

「ふえ？」

「ってなんで色紙握り締めてるんですか！？ あなたもですか！？」

わくわくしながら順番を待っていた雪に、裏切られたような顔で叫ぶ咲。

「ち、違うのよ？ 私は別に……」

「ふ、ふふふふふふふ」

地の底から響いてくるような笑い声に、我に返る一同。振り向けばいつの間にか復活していたドクターが、これまたいつの間にか復活していたホワイトモンキーを従えて不気味に笑っている。

「ふふふ。そんな黒いところも素敵だよシェリナたん」

「た、たん……」

「気をつけて！ あいつプロよ！」

何のプロだ。

「こうなったら力づくでも君を花嫁にする！ ホワイトモンキー、全力で行けえっ！」

「うっきいいいいい！」

その言葉に応じて背中の中を棒を抜き取り、構えるホワイトモンキー。その体からは先ほどまでとは比べ物にならないほどのプレッシャーが！

「シェリナ！ こっちも武器を使っただ！」

「ムート！……生きていたの？」

「ひどい！？」

「でも武器って？」

「そしてあっさり流した！？……この事については後で話をしよう。とりあえず、君の手袋の甲の部分についている宝石を使っただけだ！」

「宝石？」

確かに、はめている純白の手袋には甲の部分にレンズのようなものが張り付いている。

「その宝石に自分の瞳を映して、ほしい武器をイメージして“視る”んだ。そうすれば望んだ武器が実体化される。そのイメージが強ければ強いほど強力な武器になる」

「イメージ」

そしてシェリナはイメージを始める。敵を倒すための武器。強力な力を持った武器を。

次の瞬間、手の甲の宝石からまばゆい光が！

「つく！？ ホワイトモンキー！ 行きなさい！」

「うきつ！」

言葉と同時に飛び出すホワイトモンキー。だが、その時にはシェリナの手の中に光が収束していた。

マテリアライズ
「幻視実体化」

旧ソ連で発明されたその武器の名称は、ロシア語で携帯式対戦車

「ちよつとまつてええええええええええ！？」

あわてて致命的な間違いを犯したシェリナに抗議を入れるムート。

「何で？ 何でRPG？ 何でそんな血も涙も無い兵器が魔法少女の武装なの？」

「敵と戦う時は、相手のリーチ外からの、圧倒的火力による殲滅が一番安全かつ効果的」

「そうだけど、そうだけど違う！ そんな無慈悲な戦法を採らないで！？」

言い合う二人の後ろ。ギャラリーの三人も意外な結末に啞然としている。

「……これって、いいのか？」

「……まあ敵は倒したし」

「……問題ない、のかな？」

一応敵は倒した。こちらに被害は無い。だから普通は喜ぶべきなのだが、なぜか釈然としない。と、その時！

「ふ、ふふふふふふ」

「なに！？」

その声は煙の向こうから聞こえてきた。あわててそちらに視線を向ける五人。するとそこには！

「ま、まさか……このような、手段で……ごほっ」

まだ五体満足のドクターとホワイトモンキーの姿が！

「よ、よかった！ ……じゃなくて。あ、あの攻撃で生きているなんて！？」

敵の生存に思わず喜んでしまうムート。さすがにあのまま昇天されたのでは色々と問題があったらしい。

「ふ、ふふふ……この程度の攻撃で、私達がぐはっ」

「いや、本当に生きてるだけみたいなんだけど」

よく見てみれば二人ともぼろぼろだった。その全身を光のヴェールが覆っているところから視るに、ガードしたものの、衝撃を全て吸収することはできなかったらしい。

「障害が高ければ高いほど恋は燃え上がるとはいえ、こうなったらあれを使うしかないようですね…… ホワイトモンキー！」

「うきやああああ！」

雄叫びを上げるホワイトモンキー。そして、おもむろに自分の毛皮から毛を数本取り取る。

「な、何やってんだ、あいつ？」

「……」

「……まさか」

その行為の意味が分からずに首を傾げるギャラリー三人。だが、シェリナとムートは緊迫の面持ちで敵を見据えている。

「ふははははは！ 見よ、我が実験体の神秘の力を」

次の瞬間、ホワイトモンキーがけに息を吹きかける。飛ばされた純白の毛は宙を舞い、そして……

ボン！ という音と共に煙に包まれ、その中から本体と寸分たがわぬホワイトモンキーが！

「なっ何だと！？」

「孫悟空！？」

「うわあ」

あつと言う間に数十匹に増殖したホワイトモンキーを前に驚愕の一同。

「ふははははははは！ これぞこちらの神話を元に開発した分裂、増殖術式！ コピーとはいえその能力はオリジナルと寸分たがわない！ この大群が相手では先ほどの単発式の兵器は役には立つまい！」

「つく、確かに。RPGは使い捨てだから。ある程度の犠牲覚悟で突っ込まれたら……」

この事態に青ざめた表情のムート、しかし、

「大丈夫」

その窮地の中でも揺らぐことなく響く声。

「私は負けない。必ず皆を守って見せる。」

「シェリナ……」

まだあつて間もないのに、この安心感は何なのだろう。見た目は儂く、頼りなく見えるこの少女。だが、この少女ならばやってくれる。そんな期待を抱かせてくれるせ横顔に、ムートは見とれた。

そしてシェリナは、再び武器を手取る。

マテリアライズ
「幻視実体化」

その手に光が収束する。

「ふははははは！ シェリナたん！ いくら強力でも一発だけではこの群れを止めることは……え？」

製作されて70年以上経つが、基本構造・性能・更新コスト等トータル面でこの機関銃を凌駕するものは、現在においても現れていない。1933年に米軍が制式採用。第二次世界大戦以来、現在でも各国の軍隊で使用されている。

口径50の12.7mm、装弾数：ベルト給弾（1帯110発）
、全長：1,645mm、重量：38.1kg、発射速度：約
400～600発/分、銃口初速：853m/s、有効射程：
700～1,000m

別名「キャリバー50」や「フィフティーキヤル」。世界で最も著名な重機関銃。その名は

「ブローニングM2重機関銃！？」

デストロイ
「殲滅」

ドガガガガガガガガガガッ！！！！

鋼の体を持つ悪魔は唸り声を上げながら眼前の敵を紙くずのように吹き飛ばしていく。

50口径の威力はすさまじく、着弾するたびに体がは（以下検閲削除）、頭がふ（以下検閲削除）、内ぞ（以下検閲削除）。

すべてが終わった後には、動くものは残っていなかった。土煙にまぎれて辺りを見渡せないことは救いなのか。

と、猿達の遺骸が煙と共に消えていく。どうやら分身体は損傷が激しいと消えてしまう仕組みらしい。

ジ・エンド
「殲滅完了」

「だから待てつつってんだろーがあっ！」

さすがにこの暴虐に切れるムート。当たり前だが。

「何で！？ 何で近代兵器！？ 君魔法少女でしょ！？ 魔法で戦

おうよ！ 何で頭の中そんなにフルメタルなのさ！？」

その質問にしばし考えこむシェリナ。やがてムートの口元に耳を寄せる。

「雪お姉ちゃんが『いつかあの泥棒猫を殲滅するために』って何冊かそんな本を」

「……そのお姉さんの思い人に『早く選べ』と伝えておいて」

でなければ確実に死人が出る。血の雨が降る。

「それに私はまだ魔法になれていない。集束砲とか使えない。まだ仕組みが分かっている兵器のほうが使いやすい」

「……だからなんで思考がそっち方向なんですか？」

シェリナが考える魔法はリリカルな人達が使っているものことらしい。まあ、確かにあれは近代兵器とどこいってこの威力だが。

「く、くくくくううう……」

その時、再び煙の中から笑い声……というか、

「う、うううう……ま、まだまだ……」

煙の向こうから再びドクターとホワイトモンキー。もっとも、二人ともぼろぼろの上、半泣き状態である。重機関銃の掃射の眼前にいたのだから無理もないが。

「こ、ここは紛争地帯ですか？ あo程度のお給料でこの仕事じゃ

割に合いませんよ……」

「……あのー、もしよろしければこのまま帰っていただけないでしょうか？ これ以上は、僕達も惨劇を見たくないというかなんと言うか」

ものすごく腰を低くして相手に撤退を呼びかけるムート。さすがに気の毒になっただけらしい。

「で、でも、良い」

「……はい？」

突然、雰囲気を変えるドクターにきょとした顔を向ける。

「今まで感じたことの無かった衝撃が体を駆け巡っています。今こそ言おう！ シェリナたん！ これは君への愛だ！」

大真面目にそんなことをのたまう白衣に、引く一同

「お、おい、なんかやばい方向に目覚めてないか？ あいつ」

「隠れた性癖、通称Mが開花したみたいだね」

「衝撃って、頭を強く打ったんじゃないかしら？」

「というか、このご時勢に年齢が低い子への偏愛がどれほどやばいのか分かってないよ。下手したら色々な意味で世界が終わるって」

そんな中、無表情でドクターを睨み付けるシェリナ。そんな彼女の様子をいぶかしげにのぞきこむムート。

「どうしたのシェリナ？」

そして、ムートは聴いてはいけない言葉を聴く。

「……うざい」

「……え？」

一瞬自分の耳がおかしくなったのかと思った。

「いいかげん飽きた。さっさと終わらせる」

「……………」

目が本気だ。どうやらさすがに限界が来ていたらしい。確かに、いい大人に執拗に愛を囁かれては気分のいいものではないのだろうが。

と、次の瞬間シェリナから噴出す高密度の魔力！

「ちょ、シェリナ！？ 一体何を！？」

「……消す」

人（竜）生の中でこれほど恐怖を感じたことは今まで無かった。何をするつもりなのだろうか。これまでの結果から見るに核兵器と出すのではないだろうか。それとも衛星軌道上からのレーザー攻撃だろうか。

とにかく、ただではすまないだろう。

「皆ー！ 逃げてー！ ほんとにやばいー！」

ギャラリー三人に退避を呼びかける。すぐに事情を察した雪が萌と咲の手を引いてその場から駆け出す。

「ふははははは！ 行けホワイトモンキー！ 二人の愛のために！」
「うきやああああ！！！」

神風を遂行するホワイトモンキー。その叫びがやけくそ気味に聞こえたのは、聞き間違いではないだろう。

だが、シェリナはその突撃を前に、微動だにしなかった。その巨体を前にしても、その瞳にこめられた意思は微塵も揺るがない。

そしてその口は紡ぐ。終局の詩を。

ポイントロック
「視点固定」

交差させ、目の前にかざした手の甲を見据えてそう呟いた瞬間、光が溢れ、集い、意思を持つかのようにホワイトモンキーを絡めとる！

「うきやつ？ うきやああああ！！？」

光はホワイトモンキーを絡め取ったままドクターの方へと迫る。

「のわあっ！？ 何ですかこれはっ！？」

そのままドクターも絡め捕り、二人を上空へと運ぶ。

「我八時ノ彼方ヨリ、世界ヲ見据エル者。我ガ視線ハ過去ヲ改変シ、現在ヲ打チ消シ、未来ヲ紡グモノナリ」

紡がれる詩は世界を変えていく。

「こ、これって、詠唱！？ しかも、高位^{ハイ・スベル}世界言語を使つた！？
そんな！？ 今日始めて魔法使いの力を手に入れた子が！？」

「いやああああああ！！ 必殺技ああああああ！！！！！！！」

「だから萌！ 写真とっている場合じゃなくて！」

「……あの子？」

その眼に映るのは

「ソノ力持テ、我ガ視線^{みらい}ニ立チ塞ガリシ者ヲ」

絶対なる未来^{しゅつじ}！！！！

「コノ世界ヨリ放逐セン」

額の宝石より、全てを圧倒する金色の光があふれ、一直線に敵へと向かっていく！

「グランスレイザー視界内存在消去！！！」

金色の光はその内に敵を包み込み、その中で、敵の姿が消えてゆく。

「うきやあああああああ！！！」

「これはっ存在の……！？」

そして完全に光が治まった時、そこには塵一つ残っていないなかった。ドクターもホワイトモンキーも影も形も無い。

「……ふう。コンバットクロース戦闘終了」

敵が完全に消えたことを確認し、ようやく緊張を解くシエリナ。

「す、すい……」

その背中を、畏怖すら込めて見つめるムート。

「今のは、“存在消去”。物体ではなく、それが存在しているという情報を破壊して、存在そのものを消してしまう魔法。ゆえに、回避も防御も不可能。ほとんど禁忌指定の大魔法なのに、それをつい

さつき魔力に目覚めたばかりの素人が……」

『いやーお兄さんも驚きです。まさかここまでの力とは』

「「「「「!?」「」」」」

いきなり響いてきた声に四人が驚愕の表情を浮かべる。その声は

……

「ドクター!? 何で、存在消去を食らって生きていられるはずが!?」

だが、その中で唯一シェリナだけがその表情を動かさなかった。

「やっぱり、さつきのは偽者」

「なっ!?!」

『おや、気付いていましたか』

ふふふふと愉快そうに笑うドクター

「大猿に比べて手ごたえがおかしかった。まるで、薄い紙を相手にしたような」

『その通り、あれは私の精神の一部を移した人形。とはいっても、先程の存在消去の影響で本体の方に結構なダメージが来ていまして、今回はここまでという所ですか』

「……………」

『ふふふふ、その険しい顔も素敵ですよシェリナたん。やはり君は私の運命の相手のようだ。必ず、その体も魂も手に入れますよ』

「ふざけるなっ! シェリナはお前なんかには負けない!」

「ムート」

ドクターの言葉に激昂するムート。どうやら今の言葉が彼の逆鱗

に触れたらしい。

『お姫様のペットなんぞに興味は無いんですよ。私がほしいのはイデアとシェリナ、その二人だけです』

「貴様ッ」

「……落ち着いて、ムート」

「シェリナ、でも！」

激昂のままに空に魔力を放とうとしたムートをシェリナが抑える。

「イデアは、私が必ず助け出す」

「……シェリナ」

「そして、このストーカーは必ず殲滅する」

「……あ、ありがとう」

無表情で淡々と呟くシェリナに、再び恐怖を覚えるムート。色々な意味で、頼りになりすぎる相手というのも考え物だ。

『ふふふふふ、そんな君も素敵ですよシェリナ。ですが』

『おいこら変態！ なに人の人形を勝手に使ってやがる！』

『え？ あ、ちよつと待って。今いい所……』

『ふざけんな！ しかもどういう使い方しやがったてめえ！ 反応が完全に消えちまつてるじゃねえか！』

『そ、それはその……』

『あのクラスの人形作るのに、ドンだけ手間暇かけてると思ってるやがる！ てめえの内蔵ばらして部品にしてやろうかおお？』

『ち、ちよつと待ってください！ ちゃんと弁償……！ って待って！ メスを入れないでぎゃああああああ！？』

「……」

それっきり声は聞こえなくなった。

「殲滅するまでもなく、昇天した様な……」

「いや、あの手のキヤラはゴキブリ並みにしぶといから、たぶん生きてると思う」

「だ、大丈夫なのかな」

「お姉さん、あんな奴の心配はしなくていいです」

「……（こくり）」

できればこのまま出てきてほしくない相手だが、おそらくまた戦うことになるだろう。そういう予感がした。いやな予感だが。

こうして、真眼の魔法少女シェリナのデビュー戦は幕を閉じた。

「それにしても、ああいう風に魔法が使えるなら、何で最初から使わなかったの？」

時刻は夜の8時を回ったところ。夕食を終えた後、紅凧家のシェリナの部屋で、人前に姿を見せられないムートが残り物をご馳走になつていた時、不意に思い出したように質問を出した。

対するシェリナはその問いに明日の予習の手を止める。

「……あの時も言った通り、最初は魔力の扱い方がよく分からなか

った。二つの武器を具現化させてコツを掴んだから最後は大技を出した」

「あの二つは練習だったのか。にしては凶悪すぎた気もするけど」

その言葉にしばし沈黙するシェリナ。やがてポツリと呟く。

「後ろに三人がいたから、ゆっくりと戦っていたらなかった。私は初心者。ハンデ付きで完勝出来とは思えない。被害が皆に及ぶ危険性があった。だから、早期決着のために、覚えていた限りで一番攻撃力の高いものを選んだ」

「……シェリナ」

「それに」

その声色に含まれていた感情は……

「あいつらは雪お姉ちゃんと萌ちゃんと咲ちゃんに危害を加えようとした。許せなかった」

「……」

怒りだった。そして、それを聞いて、ムートは内心で思わず笑ってしまった。

要するに、この子は身内を攻撃されて怒っていたのだ。そして、それ以上皆に火の粉が降りかからないように、短期決戦を挑んだ。

分かってしまえばなんてことはない。人一倍不器用で、人一倍優しいこの子は、皆を助けるために一生懸命だったただけなのだ。

もっとも、その一所懸命さがあの惨劇を生んだのだと思うと、

（す、素直に感心できない）

だが、この子なら、まず誰かのためにその力を使おうとするこの子ならば、できるかもしれない。

世界を救うことが。

その時、シェリナもムートも自分の考えに没頭していたので、気が付かなかった。

「シェリナー。お風呂沸いたけど私が先に入っていいかな。ってあれ？」

ノックと共に室内に入ってくる姉の雪。そして、その視線は床の上でご飯を食べているムートに釘付けとなる。

「……」
「……」
「……」

沈黙が辺りを支配する。空気がものすごく重かった。

そして

「きゃああああ！　かわいいー！」

高速でムートを抱き上げる雪。

ムギユ

そして押し付けられる双球。ムートは生まれてはじめての境地にたどり着いた。

（こ、このポリウムは！ F！？ いや、まさかその次の次元に！！）

瞬間、全身を貫く死の予感。

（！！！！）

その赤い双眸は口よりも雄弁に語っていた。

オ・マ・エ・ヲ・コ・ロ・ス

（待つて！？ ヒ ロ！？）

（誰が自爆マニアのテロリスト）

このとき、二人の間にテレパシーが成立していた。ムートにとっては死の宣告だったが。

「シェリナ、この子どうしたの？」

そんな緊迫した空気を読めない雪はムートの頭をなでながらシェリナに問いかける。

「……拾った」

「それならちゃんと言ってくれないと、別にペットを飼うことは禁止してないわよ？」

「……ごめんなさい」

そういいながらムートと視線を合わせる。

（昼間のことは覚えていないの？）

（あの時は僕も結界を張っていたから、同じ動物だって気が付いていないんだ）

「ところでシェリナ」

「な、何雪お姉ちゃん」

そして雪は致命的な一言を言う。

「この子、なんていう動物かな？」

（（！！！！））

どうする。視線を合わせながら必死にこの場を逃れる言い訳を考える二人。まさか馬鹿正直に『竜です』などと言えるわけもない。いや、もしかしたらこの人相手ならば通用するかもしれないが、あまりそういう情報を外部に漏らすのもどうか。

少ない時間で散々考えて、シェリナが出した答えは

「は、鳩？」

（白いから！？ しかも疑問系だし！？）

突っ込みたいのを必死でこらえるムート。

「そうなんだ」

（（通じた！？））

もう少し疑ってほしい。この人の将来が心配になる。

「でも、鳩にしては変わっているわよねこの子」

「……と、突然変異で親に捨てられたのを私が拾った」

「そうなんだ、かわいそうに。でも、もう大丈夫だよ」

何も疑うことなくあっさりとムートの存在を受け入れる雪。別の意味で不安を覚えるが、とりあえず安堵する二人。

「シェリナ、もうこの子に名前をつけたの？」

「ムート」

「ムート君か。じゃあムート君、一緒にお風呂に入ろうか」

その瞬間、二人の思考は真っ白になった。そんな二人の様子にも気付かずに『ふかふかー』とか言いながらムートを撫で回す雪。

そして、最初に自我を取り戻したのはムートだった。

（お風呂ってまさかはだ！%>?<〽+¥）

そして混乱。

「じゃあシェリナ、私ムート君とお風呂に入ってくるね」

（行くのですか！ 入るのですか！ 向かう先はGの楽園ですか！
もうどこへでも連れてってください）

この時の事について後にムートはこう語る。

『死神を見た』と。

「雪お姉ちゃん」

その声は、ムートにとって地獄の亡者のそれに等しいものだった。白熱した思考が、一瞬で凍結する。

「ムートは私がお風呂に入れるから、雪お姉ちゃんは先に入ってきて」

「えー、私もムート君と仲良くなりたいのに」

「私が入れる。もしかしたら水が苦手かもしれないし、懐いている私のほうが扱いは上」

「うーん、そうね、じゃあムート君とはまた今度入ろうかな」

（置いて行かないで！ 連れて行ってください！ ここにいたら殺される！）

そんな心の叫びは届くはずもなくムートを床に下ろした雪はそのまま部屋を出て行った。パタンという音を立てて閉められたドアが、自分の未来を暗示しているように見える。

「……ムート」

振り返れば死ぬ。だが振り返らなくても死ぬ。もはやムートには選択肢は残されていなかった。

「……お話、しよう」

世界が救われる前に、自分を救ってくれる魔法少女はいないだろうか。ムートはそんなことを考えた。

そして

後日、天真は『始業式の日、夜、紅凧家から悲鳴のようなものが聞こえてきた』と語ったという。

その5（後書き）

評価290以上で連載決定するかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9930d/>

真眼の魔法少女シェリナ 異世界見聞録偽典

2010年10月9日06時33分発行